

# 飛驒川流域地方における食生活調査 (第Ⅵ報)

食品摂取頻度からみた食生活の状況

熊沢昭子・鈴木妃佐子・鶴飼美恵子・北川公子\*

## Investigation on the Food in the Basin of River Hida(PartⅥ) On the Dietary Life from the Viewpoint of the Frequency of Food Intake

by

A. KUMAZAWA, H. SUZUKI, M. UKAI and K. KITAGAWA

### はじめに

飛驒川流域地方における現代の食生活について、食品摂取頻度の面から摂取パターンをとらえ、あわせて前報<sup>1)</sup>の食生活環境との関連においてその実態を明らかにしようとするものである。

### 方 法

調査時期および調査対象などは第Ⅴ報<sup>1)</sup>のとおりである。主婦について食品摂取頻度を調査したものであるから、以下に掲げる職業別は主婦の職業を分類したものである。農業についていえば主婦が農業に従事しているものを指すので兼業農家はこれに含まれる。また主婦が無職の場合世帯主はいわゆるサラリーマンが予想されるが、その他の職業も含み込まれることとなる。

### 結 果

#### 1 主婦の職業別からみた食品摂取頻度

各食品、料理について摂取頻度の百分率を算出した結果は表1のとおりである。なお、その頻度が最も高率であったものについてあらわしたものが図1である。

熱量性食品は、いずれの職業もほぼ似たパターンを示していた。

動物性蛋白質食品のうち、「肉」の摂取が農業に従事している主婦では少ないことが特徴としてあげられる。

ミネラル・ビタミン性食品およびいわゆる日本人の習慣食については「海藻類」の摂取頻度において商業がわずかに多い他は、いずれの食品においても職業による差はみられなかった。

以上食品摂取頻度について主婦の職業別からみた場合には、動物性蛋白質食品の摂取パターンに差がみられたが、それは農業に従事している主婦が「魚の加工品」の摂取が多く「肉」の摂取が少ないことによるものであった。熱量性食品、ミネラル・ビタミン性食品ならびにいわゆる日本人の習慣食の摂取においてはいずれの職業もほぼ似たパターンを示していた。これら

---

\* 三重短期大学

にみられるように農業に従事する主婦が「肉」を除いてほとんど他の職業と同傾向にあるのは最近の兼業化<sup>12)</sup>による影響をも受けて平準化へ近づきつつあるものと考えられる。

## Ⅱ. 農家の経済地帯別<sup>1)</sup>からみた食品摂取頻度

農業においては、営まれる地形によって諸条件が作用しその収入に差が生じてくるのでいわゆる農家の経済的観点から食品摂取パターンをとりあげ、これについて考察することとする。なお他の職業では諸要因が入り込み易いので特に農業をえらんで地域性が判然とするようにしたものである。(表2, 図2)

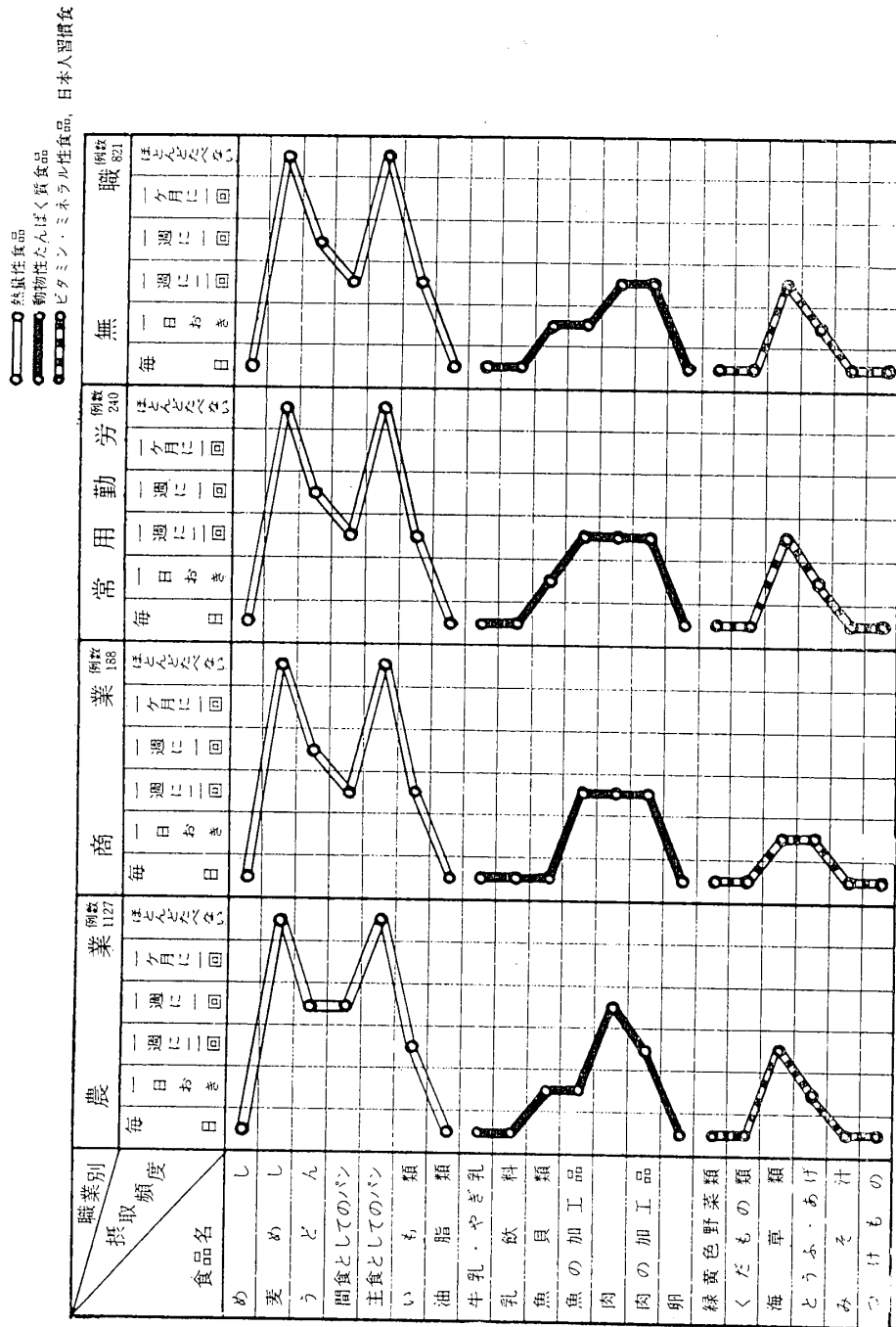


図1. 主婦の職業別からみた食品摂取頻度のパターン




「めし」は平地農村, 農山村, 山村とも 100% 近くのもの毎日常摂取しているが, 平地農村にくらべ, 農山村, 山村の順にやや少なくなっていた。

職業別 摂取頻度 食品名	農業 n=1127						商業 n=188						常用勤務 n=240						無職 n=821					
	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない
めし	91%	0%	0%	1%	0%	1%	93%	0%	0%	0%	0%	1%	93%	0%	0%	0%	1%	0%	92%	0%	0%	0%	1%	0%
麦めし	19	3	3	3	2	40	14	2	1	4	2	46	13	2	3	1	2	49	15	2	3	2	2	41
うどん	1	4	28	46	18	1	3	3	21	47	20	1	1	3	25	43	25	2	1	5	27	44	20	1
間食としてのパン	5	11	22	27	12	10	13	16	21	19	5	12	9	8	25	18	8	16	9	17	24	20	8	8
主食としてのパン	2	1	2	4	5	41	9	9	10	14	11	24	15	3	8	13	13	25	12	5	10	12	11	24
いも類	10	19	31	24	8	2	4	11	37	28	10	3	5	15	33	30	13	1	7	15	37	25	8	3
油脂類	50	25	14	5	10	0	47	23	15	4	1	1	49	24	20	7	0	0	53	24	11	5	1	0
牛乳・やぎ乳	34	6	6	5	7	22	48	9	8	7	5	10	49	10	8	6	5	13	52	5	8	6	4	13
乳飲料	23	6	8	9	9	21	50	6	8	8	5	7	34	7	6	10	7	17	43	7	8	7	5	12
魚貝類	24	30	24	13	4	2	35	22	21	7	6	1	25	28	21	14	6	0	33	35	16	8	3	0
魚の加工品	21	31	27	13	3	1	18	23	27	21	4	1	14	28	34	15	6	0	19	31	28	14	4	1
肉	2	4	19	35	27	5	5	24	36	23	8	1	4	14	33	30	13	3	5	19	36	27	10	1
肉の加工品	8	22	31	21	7	2	8	23	29	21	6	3	8	22	34	23	5	2	10	28	30	18	4	2
卵	32	28	25	9	2	1	47	30	16	3	1	1	38	29	23	6	2	1	44	28	16	4	0	0
緑黄色野菜類	43	23	18	10	2	0	35	23	23	10	2	1	29	25	27	15	3	0	36	29	21	10	2	0
くだもの類	39	25	17	9	2	10	47	25	12	8	1	1	43	25	17	8	0	0	43	30	13	5	0	0
海藻類	10	20	31	23	10	2	23	29	25	18	3	1	17	24	33	22	6	2	15	31	33	15	4	0
とうふ・あげ	22	33	27	13	2	1	25	36	23	9	1	1	22	35	31	9	3	0	19	38	31	9	1	0
みそ汁	76	16	4	2	0	0	70	18	9	2	0	0	68	21	8	3	0	0	74	20	5	2	0	0
つけもの	95	3	1	0	0	0	92	3	1	1	0	1	95	4	0	0	0	1	90	3	2	1	0	1

表 1 主婦の職業別からみた食品摂取頻度

経済地帯別 摂取頻度 食品名	平地農村 n=70						農山村 n=180						山村 n=877					
	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない	毎日	一日おき	一週に二回	一週に一回	一ヶ月に一回	ほとんどたべない
めし	100%	0%	0%	0%	0%	0%	97%	1%	0%	0%	0%	0%	90%	0%	0%	1%	1%	1%
麦めし	4	0	4	4	3	49	9	2	3	3	1	43	21	3	3	3	2	39
うどん	1	1	31	51	14	0	2	5	37	42	14	1	1	3	26	48	20	1
間食としてのパン	3	11	24	20	19	6	5	8	20	28	14	12	5	11	22	28	12	10
主食としてのパン	1	1	3	3	7	41	3	1	0	5	8	37	3	1	3	4	5	41
いも類	4	9	23	33	16	6	6	14	35	27	9	3	11	21	32	23	7	1
油脂類	64	16	10	6	0	0	46	29	41	4	1	1	50	25	14	5	1	0
牛乳・やぎ乳	33	4	3	9	3	23	39	8	6	5	7	18	33	5	6	5	8	23
乳飲料	34	6	7	9	14	6	18	6	10	13	10	18	23	6	7	8	9	22
魚貝類	9	20	43	21	3	0	23	31	28	9	3	2	25	30	22	13	4	1
魚の加工品	39	24	23	16	1	0	20	34	27	12	4	1	20	31	27	12	3	1
肉	11	14	34	23	9	3	2	2	19	31	33	4	1	4	18	36	27	5
肉の加工品	26	29	26	14	1	0	7	14	32	23	12	3	6	21	32	21	7	3
卵	43	24	21	6	0	0	33	28	26	6	2	2	31	27	25	10	2	1
緑黄色野菜類	49	27	20	4	0	0	47	21	21	9	1	0	42	23	17	11	3	1
くだもの類	30	29	17	11	3	0	44	24	16	4	2	0	37	26	18	11	2	1
海藻類	24	30	20	19	3	1	12	21	33	26	6	2	9	20	33	25	12	2
とうふ・あげ	39	33	20	3	0	0	23	34	33	8	1	0	20	33	26	16	3	1
みそ汁	64	21	10	3	0	1	63	24	7	4	1	0	80	14	4	2	0	0
つけもの	86	7	4	0	0	1	96	3	2	1	1	0	96	2	1	0	0	0

表 2 農家の経済地帯別からみた食品摂取頻度

 熱量性食品  
 動物性たんぱく質食品  
 ビタミン・ミネラル性食品、日本人習慣食

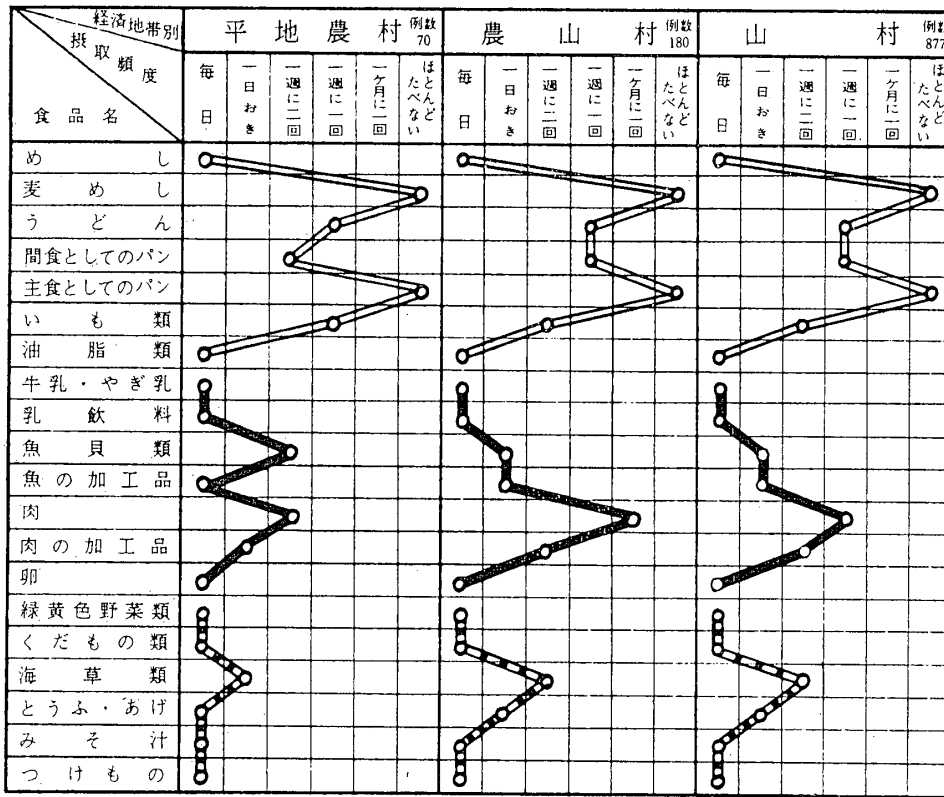


図 2. 農家の経済地帯別からみた食品摂取頻度のパターン

「麦めし」の摂取頻度は「めし」の逆比例の形となってあらわれてきている。

「うどん」はいずれの地帯も1週に1回程度が最高率を示すが、山村ではその占める率がやや低かった。

「間食としてのパン」は平地農村の摂取比率がやや高くなっている。

「主食としてのパン」はほとんど摂らないものがいずれの地帯においても最高率を示していた。

「いも類」は平地農村に比し、農山村、山村はやや摂取頻度が高かった。

「油脂類」は毎日摂取するものがいずれの地帯においても一応最高率を示すが、農山村のパターンはその内容がやや他と異なっており1日おきに摂取するものとの差が少なかった。

「牛乳・やぎ乳」は毎日摂取するものがいずれの地帯も最高率を示していた。

「乳飲料」はヨーグルト、ヤクルトなどを指すと調査票に付記したものであるが、これらの嗜好的な飲料は平地農村の摂取がやや高まっていた。

「魚貝類」は平地農村では1週に2回程度摂取するものの率が最高を示すのに対し、農山村、山村では1日おきに摂取するものが最高率となっていた。

「魚の加工品」は平地農村では毎日摂取するものが高率であるのに対し、農山村、山村ではともに1日おきが高率を示した。

「肉」は平地農村では1週に2回程度摂取するものが多いのに対し、農山村では1ヶ月に1回程度が多くなっており、山村では1週に1回程度となっていた。

「肉の加工品」は平地農村では1日おきであり、農山村、山村では1週に2回程度と摂取頻

度は少なくなっていた。

「卵」は平地農村では毎日摂取するものの率が50%近くで最高を示すのに対し農山村，山村では30%強となっており一応毎日摂取するものが最高率となっているがその率は低い。

このことは前報<sup>1)</sup>においても平地農村では自家生産品の利用が多いことがあげられているし，鶏飼育密度が他の地帯より多い<sup>4)</sup>ことも重なって摂取頻度が高くなっているものと推察される。

「緑黄色野菜類」はいずれの地帯も毎日摂取するものが最高率を示していた。

「くだもの類」はいずれの地帯も毎日摂取するものの率が高いことが認められるが，農山村ではその頻度がなお高い傾向にあった。これはこの地帯では自家消費用として生産されていることによるものとおもわれる。

「海藻類」は平地農村の摂取がやや高い傾向にあった。

「とうふ・あげ」は平地農村の摂取が多かった。

「みそ汁」は山村においてやや高率を示すが他はほぼ似た摂取頻度であった。

「つけもの」は毎日摂取するものの率が農山村，山村では100%に近いが平地農村ではやや下回っていた。

以上，農家の経済地帯別からみた食品摂取頻度には差がみられた。すなわち平地農村にあっては他の地帯に比して「麦めし」「いも類」「魚貝類」などの摂取頻度が低いことが認められた。一方「間食としてのパン」「乳飲料」などの嗜好的食品や「肉」「卵」などの動物性蛋白質食品および「魚の加工品」「肉の加工品」「とうふ・あげ」といった加工食品の摂取頻度の高いことが認められた。このように差がみられるのは所得の差によるものと考えられる。しかし本調査では経済の面を追究することは目的ではないので所得と関係があるという程度に止める。

### Ⅲ. 飛驒川流域地方における食品摂取頻度の位置づけ

	みそ汁	つけもの	生肉	魚介	ハンソーセージ	卵	牛乳※
全国平均(41年)	72.6%	62.4%	15.5%	29.8%	11.9%	61.2%	14.0%
都市部の非農家	69.2	60.0	21.1	28.8	11.9	66.5	14.7
農村部の非農家	72.9	62.6	10.3	33.2	12.8	58.2	15.4
都市部の農家	80.0	69.7	6.6	32.7	12.3	52.7	11.1
農村部の農家	81.6	67.7	2.5	29.1	10.9	47.0	10.8
飛驒全平均(43年)	73.9	93.2	3.5	27.9	8.8	37.7	42.9
農業	76.0	94.9	2.0	24.0	7.9	31.8	34.3
商業	70.2	91.5	5.3	35.1	8.0	47.3	47.9
常用勤労	67.5	95.4	4.2	25.0	8.3	37.5	49.2
無職	73.6	90.5	5.0	32.5	10.4	43.7	51.6

※牛乳については，全国調査では月ぎめを指す。

表 3 摂取頻度の状況(毎日摂取する世帯)

昭和41年度に農林省により行なわれた食糧消費総合調査<sup>3)</sup>から，つぎに示す食品について毎

日摂取する世帯の率を引用し、これと当地方の摂取率とを比較してみることにする。(表3)

「みそ汁」の摂取率は全国平均値とほぼ一致していた。

「野菜のつけもの」は当地方はきわだっただけ多いことが認められた。

「肉」の摂取頻度は全国平均値との比較では低い。しかし農村部の農家と当地方の農業者と比較すればほぼ一致している。

「魚貝類」の摂取は大体似ているといえよう。

「肉の加工品」ハム・ソーセージなどの摂取はやや低い程度である。

「卵」は当地方においては他の職業群より摂取頻度の高いとおもわれる商業においても、全国のすべての階層におよばない。

「牛乳」は当地方の飲用率が高くなっている。このことは調査時期や季節が前述したように開きがあることや、全国値では主婦について月ぎめで毎日飲用しているものの率となっているが本調査では月ぎめということにこだわってはいない。したがってそれらの条件の違いから多少の動きはあることとおもわれるが、そのような諸条件を勘案してもなお摂取率は高いと言い得よう。ちなみに昭和40年に厚生省が行なった保健衛生基礎調査<sup>4)</sup>の結果では、毎日摂取するものの率は全国平均で30.5%となっている。この場合は月ぎめを規定してはいない。当地方の摂取率が高いことの理由の一つとして考えられることは前報<sup>1)</sup>でのべたごとく業界の大資本の進出による影響を見逃すことはできないであろう。

職業	群別 摂取頻度	A		B		C		D		x <sup>2</sup> 検 定	
		例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	x <sup>2</sup> 値	判 定
農 業	イ	110	26	15	21	62	33	22	21	10.95	※
	ロ	238	57	47	64	104	56	60	58		
	ハ	71	17	11	15	21	11	22	21		
商 業	イ	16	26	5	17	4	18	1	6	8.54	
	ロ	40	65	17	59	17	77	13	81		
	ハ	6	9	7	24	1	5	2	13		
常 用 勤 労	イ	12	17	7	17	6	21	6	23	6.41	
	ロ	55	77	27	66	17	61	18	69		
	ハ	4	6	7	17	5	18	2	8		
無 職	イ	47	25	33	17	19	30	28	28	10.66	※
	ロ	109	56	130	69	36	56	60	60		
	ハ	37	19	26	14	9	14	12	12		

イ. 毎日食べる

ロ. ほとんど食べない

ハ. その他  
 1 日おき  
 1 週に 2 回  
 1 週に 1 回  
 1 ヶ月に 1 回

A. 主婦が低年令で複合家族

B. // 核家族

C. 主婦が高年令で複合家族

D. // 核家族

自由度 (4 - 1) (3 - 1) = 6

x<sup>2</sup>, 10%臨界値 10.65

※ 10%の危険率で有意差あり

表 4 「麦めし」摂取頻度の差の検定

Ⅳ. 主婦の年齢別、家族構成別からみた食品摂取頻度

「麦めし」「牛乳・やぎ乳」「乳飲料」は毎日摂取する群とほとんど摂取しない群との極端な差がみられたのでこれらの食品について検討を行なうこととした。

摂取頻度をイ（毎日食べる）、ロ（ほとんど食べない）、ハ（その他；1日おき、1週に2回、1週に1回、1ヶ月に1回）であらわし、主婦の年齢別および家族構成別に4群に分けA（主婦が低年齢で複合家族）、B（主婦が低年齢で核家族）、C（主婦が高年齢で複合家族）、D（主婦が高年齢で核家族）とした。4群間の差の検定には $\chi^2$ 法を用いた。

1) 「麦めし」の摂取頻度の差の検定（表4）

主婦が農業に従事するものについてみれば、毎日摂取する率がA群では26%、B群21%、C群33%、D群21%となっており計算の結果から危険率10%において有意の差を認めた。C群すなわち主婦が高年齢で複合家族においては「麦めし」摂取が高いと言い得る。

主婦が商業、常用勤労では有意の差は認められなかった。

主婦が無職では毎日摂取するものがA群25%、B群17%、C群30%、D群28%となっており主婦が低年齢で核家族が他の群と異なって摂取の少ないことが証明された。

以上「麦めし」摂取頻度は農業に従事している主婦が高年齢で複合家族の場合に高率となり、主婦が職業を持たず低年齢層で核化してくれば低下現象を生ずる。このことは食生活近代化への動向の指標として考えることができよう。

職業	群別 摂取頻度	A		B		C		D		$\chi^2$ 検定	
		例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	$\chi^2$ 値	判定
農業	イ	218	46	28	32	99	41	42	40	8.78	
	ロ	119	25	30	34	75	31	28	26		
	ハ	142	29	29	33	67	28	36	34		
商業	イ	45	60	16	43	12	55	14	61	4.87	
	ロ	8	11	7	19	1	5	2	9		
	ハ	22	29	14	38	9	41	7	30		
常用勤労	イ	47	46	35	59	19	48	17	57	6.11	
	ロ	14	14	4	7	8	20	4	13		
	ハ	42	40	20	34	13	32	9	30		
無職	イ	156	58	154	60	46	57	68	60	4.34	
	ロ	47	18	30	12	14	17	17	15		
	ハ	64	24	72	28	21	26	29	25		

イ. 毎日食べる  
 ロ. ほとんど食べない  
 ハ. その他  $\left\{ \begin{array}{l} 1日おき \\ 1週に2回 \\ 1週に1回 \\ 1ヶ月に1回 \end{array} \right.$

A. 主婦が低年齢で複合家族  
 B.       〃       核家族  
 C. 主婦が高年齢で複合家族  
 D.       〃       核家族

自由度  $(4 - 1) (3 - 1) = 6$   
 $\chi^2$  10%臨界値 10.65

表 5 「牛乳・やぎ乳」摂取頻度の差の検定

2) 「牛乳・やぎ乳」の摂取頻度の差の検定 (表5)

いずれの職業においても主婦の年齢別・家族構成別にみて摂取率の上には有意差は証明されなかった。

3) 「乳飲料」の摂取頻度の差の検定 (表6)

職業	群別 摂取頻度	A		B		C		D		x <sup>2</sup> 検 定	
		例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	x <sup>2</sup> 値	判 定
農 業	イ	149	30	25	30	59	27	26	26	6.83	
	ロ	165	33	19	23	80	36	30	30		
	ハ	191	37	40	47	83	37	44	44		
商 業	イ	45	63	19	50	19	76	11	46	11.83	※
	ロ	9	12	2	5	2	8	1	4		
	ハ	18	25	17	45	4	16	12	50		
常用 勤 労	イ	36	45	23	47	12	32	10	34	7.90	
	ロ	16	20	6	12	13	36	6	21		
	ハ	28	35	20	41	12	32	13	45		
無 職	イ	135	54	125	51	37	51	59	52	1.71	
	ロ	36	14	34	14	10	14	20	18		
	ハ	78	31	85	35	25	35	35	31		

イ. 毎日食べる  
ロ. ほとんど食べない  
ハ. その他 { 1日おき  
          1週に2回  
          1週に1回  
          1ヶ月に1回

A. 主婦が低年齢で複合家族  
B.       "       核家族  
C. 主婦が高年齢で複合家族  
D.       "       核家族

自由度 (4 - 1) (3 - 1) = 6

x<sup>2</sup>, 10%臨界値 10.65

※ 10%の危険率で有意差あり

表 6 「乳飲料」摂取頻度の差の検定

主婦が商業に従事しているものについては毎日摂取する率がA群では63%, B群50%, C群76%, D群46%となっておりC群が他の群より摂取が多いことが証明された。すなわち主婦が高年齢で複合家族において「乳飲料」の飲用が高いことが認められた。商業に従事する主婦が高年齢層になるにつれ、主婦の座が確立してくるところから経済的にも自由がきき、摂取が多くなっているのではなからうか。しかし「牛乳」よりも嗜好的な「乳飲料」が高率であることに注目したい。それは栄養的見地からみれば、「牛乳」とは質的に異なっている。したがって今後はこの価値について主婦が十分認識するような栄養指導を要するものとおもわれる。

V. 食品摂取パターンの近代化への動向

1) 「麦めし」摂取頻度と各食品の摂取頻度との関係, その1, (表7)

前述したように「麦めし」摂取頻度については主婦の年齢・家族構成の別からみて差異が顕著であった。したがってその摂取の多い群と少ない群について「主食としてのパン」「牛乳・



食 品	群 別 摂取頻度	A'		B'		x <sup>2</sup> 検 定	
		例 数	%	例 数	%	x <sup>2</sup> 値	判 定
主 て 食 の と パ ン	イ'	55	<u>43</u>	8	5	55.397	***
	ロ'	73	57	141	95		
牛 乳	イ'	169	<u>77</u>	113	53	38.897	***
	ロ'	38	18	100	47		
肉	イ'	75	<u>82</u>	22	18	86.075	***
	ロ'	17	18	101	82		
卵	イ'	219	99	178	98	0.421	
	ロ'	3	1	4	2		

A' : 麦めし摂取頻度が少ない群  
B' :       "      多い群

イ' : 摂取頻度が毎日か1日おき

ロ' :       "      1ヶ月に1回かほとんど摂取しない

自由度 (2-1) (2-1) = 1   x<sup>2</sup>, 1%臨界値 6.635

\*\*\* 1%の危険率で有意差あり

表 7 「麦めし」摂取頻度と各食品の摂取頻度との関係 (その1)

やぎ乳」「肉」「卵」などのいわゆる近代的食品との摂取頻度における関係を見た。

「麦めし」摂取の少ない群すなわち主婦が無職で低年齢層で核家族の群をA'とし、「麦めし」摂取の多い群すなわち主婦が農業で高年齢層であり複合家族の群をB'とした。各食品について毎日、あるいは1日おきといったように摂取頻度の高い方をイ'とし、低い方すなわち摂取頻度が1ヶ月に1回か、ほとんど摂取しないをロ'として検定を行なった。その結果は「主食としてのパン」「牛乳・やぎ乳」「肉」においてそれぞれ有意差がみられた。すなわち「主食としてのパン」「牛乳・やぎ乳」「肉」はともに「麦めし」摂取の少ないA'群がよく摂取していることが証明された。「卵」の摂取に関しては「麦めし」摂取の多い群でも少ない群でも差がないという結果を得た。

## 2) 「麦めし」摂取頻度と各食品の摂取頻度との関係, その2 (表8)

「麦めし」摂取頻度の多少によるA'群, B'群の分類はその1の通りであるが, 各食品の摂取頻度においてイ'', ロ''のように処置した。すなわち「くだもの類」「海草類」「とうふ・あげ」「みそ汁」「つけもの」などの摂取上の特色からイ''は毎日の摂取頻度をあらわしロ''は1週に1回, 1ヶ月に1回, ほとんど摂取しないというような少ない群をあらわした。「くだもの類」と「海草類」はA'群すなわち「麦めし」摂取の少ない群がよく摂っていることが証明され, その他の食品は両群間に有意差が認められなかった。

「麦めし」はVB<sub>1</sub>の摂取をすすめる上から栄養食といえよう。しかし他の食品群とのバランスが保たれていない現状での当地方における「麦めし」摂取は, 単に習慣的なもの, あるいは経済性といったもので栄養的配慮から摂取されているとは言い難い。したがって農業に従事し高年齢層で複合家族における主婦の栄養的レベルはあまり高くないものと診断される。

## 3) 平地農村と農山村・山村の食品摂取の動向



飲料」の摂取頻度を指標として検定した。その結果は主婦が農業に従事しており高年令で複合家族では「麦めし」摂取が高くなっており、主婦が無職で低年令で核家族においては低くなっていた。「牛乳・やぎ乳」は有意の差は証明されず、「乳飲料」においては主婦が商業に従事し高年令で複合家族において摂取頻度が高いことが証明された。

・食品摂取パターンの近代化への動向をみるために「麦めし」摂取頻度の多少といわゆる近代的栄養食品の関係をしらべその結果から近代化を推測した。「麦めし」摂取の高い群すなわち主婦が農業に従事し高年令層で複合家族では、いわゆる近代的栄養食品の摂取頻度が低かった。

・平地農村の食品摂取パターンは他の農山村より近代化が進みつつあることが認められ、今後の農山村の食生活の方向は平地農村の食品摂取パターンを追うものと推測される。

・飛騨川流域地方においてはその大部分が農山村、山村の様相を呈している。今回この地域について食生活の調査を行なっていささかの結論を得たのであるが、調査結果のうち特に平地農村に比して農山村、山村の食品摂取パターンの相違していることおよび近代化への動向などについては本調査地域以外の農山村、山村においても共通性を持つものとおもわれる。

・本調査では食品摂取頻度の面を中心にして食生活の状況をしらべたものであるため、その他経済性の追究などは残された問題となる。

稿を終るにあたり、ご懇切なご助言を賜った本学教授松田延一博士に深く感謝申し上げます。

調査をするにあたりご高配をいただいた岐阜県教育委員会社会教育課の方々に対し、厚くお礼申し上げます。なお、調査・集計については仲美恵子助手・成田充子助手・本田道子研究員のご協力を得たことを記し、ここに謝意を表する次第である。

#### 参 考 文 献

- 1) 鈴木妃佐子他：(1970) 飛騨川流域地方における食生活調査第Ⅴ報，食生活を取り巻く諸条件，名古屋女子大学紀要16号
- 2) 松田延一：(1970) 飛騨川流域地方における食生活調査に関する補論その2，食生活の近代化傾向と農家の食糧生産の動向，名古屋女子大学紀要16号
- 3) 農林省：農林経済局統計調査部：(1969) 食糧消費総合調査，農林統計協会
- 4) 厚生省：(1968) 保健衛生基礎調査報告，厚生統計協会